やまと 万葉がたり

春日野に 煙立つ見ゆ 少女らし 春野のうはぎ 採みて煮らしも

作者未詳(巻十・一八七九)

春が近づくと楽しみなのが、この時期にしか食べられない山菜です。この歌の作者は、春の春日野に煙が立つのを見て、少女たちが野で摘んだ「うはぎ」を煮ているのだろうと歌っています。「うはぎ」はヨメナのことかとされており、現代でも食べられている春の山菜です。

人間の歴史は、ある一面では食料獲得の歴史ともいえます。万葉人が生きた飛鳥時代後半から奈良時代は、多くの人が国家から班給された口分田を耕作して生きていました。1戸あたりの口分田から得られる米の収穫量については、1戸の人々が生きていけるだけの米は収穫できなかったとする説と、生きていくのに十分な収穫量があったとする説が対立しており、万葉人の食生活の様子にはまだ解明できていないことがたくさんあります。

ただし、仮に口分田からの収穫米だけでは生活できなかったとしても、万葉人が米だけを食べていたわけではありません。米以外の雑穀はもちろん、田んぼや水路に生息する魚を獲る水田漁撈も行っていたと思われ、万葉人は稲作以外にも多様な生業を営んでいたはずです。そうしたさまざまな食料獲得方法のひとつに、この歌に詠まれるような山菜採集もありました。

山菜採集は、雄略天皇の御製歌とされる「万葉集」巻一の巻頭歌にも詠まれるように、「万葉集」では女性の行為としてみえることが多いようです。大伴家持も紀女郎から、春の野で採った茅花を食べてお太りなさいという歌を贈られています(巻八・一四六〇)。このように官人層の男女の歌にも詠まれるほど、山菜採集は身近なこととして万葉人の食生活を支えていたようです。

ところで、「うはぎ」のこととされているヨメナをインターネットで検索してみると、多くの人が「ヨメナごはん」を春の楽しみにしているようです。私もヨメナを見つけて作ってみたいと思います。

【訳】春日野に煙の立つのが見える。少女たちが春野の、嫁菜をつんで煮ているらしいよ。

(県立万葉文化館主任研究員・吉原啓)

=次回は18日

毎日新聞
2020年（令和2年）3月18日（水）　㊐　奈良

やまと万葉がたり

あかねさす　昼は田賜びて　ぬばたまの　夜の暇に　摘める芹子これ

葛城王（巻二〇・四四五五）

忙しい仕事の合間を縫ってでも、あなたのために尽くしましたよ――そんな苦労話をアピールされるほど、鼻についてしまうこともあります。この歌は、729（天平元）年に葛城王（後の橘諸兄）が、セリの包みに添えて女性に贈った歌です。贈られた女性は、あなたは立派な男性だと思っていたのに、刀を帯びて田んぼでセリを摘んでいたのですか、と相手をやり込める歌（巻二〇・四四五六）を返しています。

職務にまい進していると思ったのにセリを摘んでいたのか、という感想はもっともかもしれません。しかし、昼間に忙しく働き、夜にも女性のために作業をする大変さを自分の身に置き換えてみると、女性側の手厳しくも見事な返しに、思わず苦笑してしまいます。

天平元年は、口分田の班給が行われた年でした。律令国家は、死亡や出産、成長などによる耕作者の更新のために、6年に一回、口分田を百姓に与えなおします。この歌の題詞には、口分田を分け与える班田使であった葛城王が山背国からセリと歌を贈ったとあり、彼が班田に従事していたことがわかります。

班田は、後に実施されなくなっていきますが、それは班田関係業務があまりに大変だったことも一因であるようです。葛城王が、昼の仕事の合間ではなく仕事が終わった夜にセリを摘んだというのも、あながち誇張表現ではないかもしれません。それでも、昼は忙しく働いて、夜は夜で貴女のためにセリを摘みましたよ、という押し付けがましさが、手厳しい返歌を招いたのでしょうか。

ところで、私はセリが好物なので、根つきのセリを仕事帰りに見かけると、大量に買い込んでセリ鍋にすることがあります。忙しく働いた自分へのご褒美というわけです。それを思うと、仕事の後にセリを摘んで他人のために贈った葛城王は、つくづくすごいなあと思うのです。立派な男性だからこそ、仕事終わりに人のためにセリを摘めるのですよね。

【訳】あかねさす昼は田を与えて、ぬばたまの夜、公務の暇に摘んだ芹子ですよ。これは。

（県立万葉文化館主任研究員・吉原啓）

＝次回は4月1日